

目 次

方言学 尋求→方言学 造成

┌ 歴史的現実の方言を追求する学
└ 現在学トシテノ方言学

～陳 志～	5
序 説	6
第 1 部	6
第 2 部	8
第一章 国語方言学概論	9
第二章 方言学体系	91
前がき	91
別 記	92
方言学体系	92
あとがき	129

第三章	方言学覚書	131
付稿	方言学体系を予想しての旧二作	134
第四章	方言学	137
第一節	拙著『方言学』	137
第二節	同『方言学原論』	138
第三節	同『方言学の原理』	140
第四節	同『方言学の精神』	141
第五章	汎生活語学へ	143
外篇	理想の国語学を考えて	146
後語	～私が求めてやまない方言学のため～	148
I	表現の学	148
II	社会言語学との考えかたについて	150

方言学 尋求 → 方言学 造成

歴史的現実の方言を追求する学
→ 現在学トシテノ方言学

ば、この作品を疎外することもできかねるのであります。

一案を得ました。このものを縮約することです。さいわいにも、学友、友定賢治氏は、拙作につき、丹念きわまるご努力をもって、抄録に力めてくださいました。氏によって得られた『方言学概論—方言研究の理念と方法—』は、三十八字詰め三十八行で五十三枚のものであります。今は、これを上梓させていただきます。

国語方言学概論

—方言研究の理念と方法—

序 説

昭和に復興した方言研究は、西洋における科学的な方言研究を吸収し、ないし補助的な諸科学の刺激をこうむり、かくて本格的な研究態度に入り、地道な、根底から築き上げんとする傾向を強く見せて来たことは事実であるが、しかし、かかる国語方言研究により、しかも今日までに至るかなりの日子間においていかなる研究の成果が齎されたか。昭和に出でた研究は文字どおり澎湃たるものがあるにもかかわらず、なおかくのごとき再疑問を発せんとする私は、必ずや至純な動機の下に上の反省の根拠を捉えていることを信ずるものである。

国語方言研究史上に立つときその業績の高峯をなすのは国語調査委員会の手になった全国的な音韻語法の調査である。方言研究の後の賑やかさも上の大事実の上であり、或いはその実証的な効果の上に、より深い調査研究をなさんとするものに外ならない。

次に我々の脳裏に生々たる業績は柳田先生のそれである。その論述の次第ないし結果において俄に万人を納得せしめ得ざるものあることは早く人々によって称えられている所であるが、今は特にその高邁な博識による方言事象一般に対する刮目的な見識を注意したいのである。殊にその音韻変化を広く深く見窮めんとすることによって国語方言史的な開拓をされて行く所は、慥に多くの啓示をもったものであり、少なくとも方法論的には大いに学ぶ所がなくてはならぬことを痛感させるのである。

以上のごとき二高峯を列举せんとする私には、方言研究の本道はいかにあるべきかとの理念的なものへの探究心と、現実の状況を見ての不滿的な疑問との